

連載開始から2年！

「ブック検索」裁判で、
本誌（週プレ）ついに

Google【グーグル】に勝利！

ルポライター・明石昇二郎

&ルポルタージュ研究所

（『週刊プレイボーイ』2011年4月
25日号）

グーグル敗れる！

フクシマ発の「原発震災」発生で日本中の報道機関が忙殺されている最中の3月23日、米国ニューヨークから「吉報」が飛び込んできた。グーグル社が世界中の著作権を征服しようと企んだ「海賊版事件」が米国の裁判所で断罪され、その野望が打ち砕かれたのである。

*

日本をはじめ世界中の書籍の全文をデジタルスキャンし、ユーザーの興味に合った書籍をインターネット検索で見つけ出せるサービス――。

グーグル社の「グーグルブック検索」（現在は「グーグルブックス」と改称）のことだ。同社は著者や出版社の許可を一切得ずに、大学図書館などの蔵書を勝手にデジタルスキャン。その上でサービスを強引に見切り発車させていた。そのため2005年9月、米国の作家組合などから著作権侵害だとして訴えられていた。

しかし08年10月、グーグル社は米作家組合などを味方に取り込むことに成功し、世界に向けて「宣戦」を布告し始める。世界各国の著作権者を「グーグル社に著作権を侵害された被害者」（＝原告）と勝手に見なし、わずかな解決金を支払うことで無断スキャン行為とそのデータのネット販売を合法化しようという「和解案」を、世界中の本の著者や出版社に対して一方的に突きつけてきたのだ。

インターネットへの「著作権の開放」を迫るグーグル社のことを、幕末の日本に開国を迫った「黒船襲来」に喩え、
「和解案」を好意的にとらえる報道もあった。が、その実態は著作権の「開放」という前向きなものではなく、収奪でしかなかった。「黒船」はむしろ「海賊」と言ったほうがピッタリだったのだ。

この事件の被害者に筆者が含まれているのを知ったのは、「グーグル和解案」を知らせる講談社からの手紙がきっかけだった。和解案は英語で書かれていた上に難解極まりないので、日本の大半の出版社や新聞社是对応に苦慮していた。そんな中、筆者と本誌『週刊プレイボーイ』は果敢にグーグル社に反撃を開始する。

識者の大半が「勝ち目はない」と言う中、筆者はまず、著作権法違反の被害者としてグーグル社を警視庁練馬署に刑事告訴し、徹底抗戦の狼煙を上げた。次に、難解な英語の和解案の解説に着手。その正体を暴きつつ、和解案を審査していたニューヨーク南部地区連邦地裁に異議申し立てをすることを決断する。**目的はただひとつ、和解案を潰すこと**だった。

こうした筆者の戦いの模様は、本誌で連載した「グーグルの『正体』を暴く！」を通じて、事件と同時進行で随時報告していった。この連載は実に9回にも及び、その大半は拙著『グーグルに異議あり！』（集英社新書）に収録されている。

和解案を審査するニューヨーク南部地区連邦地裁には、和解案の成立を阻止すべく世界各国の著作権者から異議申し立てが殺到した。最終的にオプジエクシオンは四〇〇通にも及ぶ。日本からは、筆者をはじめ日本ペンクラブ

など複数のオブジェクションが裁判所に提出され、中にはドイツ政府やフランス政府など、国家として異議を申し立てたところまであった。

戦には勝ったものの……

これに対し 구글陣営は、和解案を微調整して日本やドイツ、フランスなどの「うるさかた煩型」を和解案から外し、あくまでも強行突破の構えを崩そうとはしなかった。修正された和解案を審査する「公正公聴会」は昨年2月にNYの連邦地裁で開催。日本ペンクラブの代理人も意見陳述し、同地裁のデニー・チン判事は公聴会の最後に、

「(裁判所としての) 意見を保留する」と語り、その判断が待たれていた。

そして、それから1年後の今年3月22日、待ちに待った裁判所の判断が下される。3月23日付の日経BP社ウェブサイトに「ITpro」などが報じたところによれば、チン判事は、

「著作権者の許可なく Google が多くの利益を得るこの修正和解案では、同社の立場が極めて有利になり、公正さや妥当性を欠く」と判断。和解案は「行き過ぎ」と断定した上で、和解案を却下したのだ。

た。戦いは、筆者&週プレ連合の完全勝利に終わり、卑劣な和解案は消去された。

この決定を受け、グーグル社側は「敗戦の弁」を語っている。それを報じたワシントン発3月22日付のロイター電を以下に引用する(編集部訳)。「明らかに期待はずれの判決ですが、裁判所の決定文を精査して、(今後の) 選択肢を検討するつもりです」

まったく潔くない。ニューヨークの連邦地裁の決定を受け、和解案の管理をしていたウェブサイトもこう語っている(原文は英語。カッコ内とゴチツクは筆者)。

「裁判所は、パーティー(グーグル社や米国作家組合等)の要求を否定しました。パーティーは**次のステップを考**えています」

同じ手は二度と通用しないものの、彼らの野望が潰えたわけではない。彼らはどんな「次の手」で奇襲をかけて来るのか……。

おまけに、グーグル社の海賊版製造行為は、「和解案」が成立することを前提に粛々と進められていた。

記事中の写真は、和解案が審査されている最中の昨年6月4日、米カリフォルニア大学の蔵書だった拙著『黒い赤ちゃんーカネミ油症34年の空白』(講談社)が**勝手に全文スキャンされた証拠だ**。スキャンデータをテキスト変換した際のミスも改まっていなかったともあれ、これで筆者の権利が侵害された著作は2冊目となった。被害は広がるばかりだ。

この挑発、受けて立たないわけにはいくまい。現在の「しゅうせき原発震災」が収束したら、今度は日本の裁判所を舞台にグーグル社との戦いが繰り広げられることになるだろう。その時は改めて報告したい。

配信元…ルポルタージュ研究所

Copyright (C) 明石昇二郎

URL : <http://www.rupoken.jp>